金沢城跡石垣調査と刻印

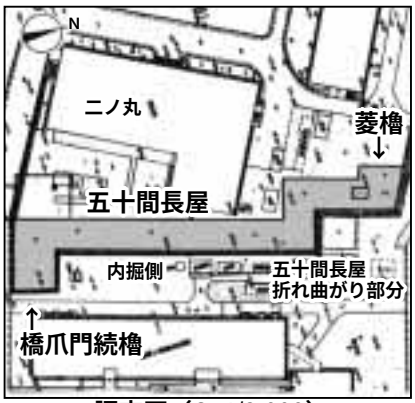
土田　友信

金沢城跡は平成13(2001)年秋の全国都市緑化いしかわフェアの開催地であり、フェア開催にむけて金沢城二の丸北東から南東に位置する菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓を江戸時代の姿に復元する計画が生じた。これらの建物は明治14年の大火で消失したのを最後に、建物の土台となる石垣台のみが存在していたが、一部にはらみが生じていることが判明した。建築物は華麗壮大な姿になる計画であるが、それとは裏腹に石垣が崩壊する危険性があった。これを理由に石垣の修築が決定した。調査は主に石垣の解体調査と石垣内側の平面調査である。石材建設業者の作業と同時に解体調査が行われ、もし遺構面が検出されると、その地点で解体作業を一時中断し平面調査を行うものである。今回は石垣解体という県内でもあまり類例のない調査について、調査方法と現段階での大まかな結果報告、観察成果より石に刻まれている符号について紹介しよう。

１　石垣解体調査方法

現在幾つかのお城で石垣解体を行っている。仙台城（宮城県）や丸亀城（香川県）など、調査方法は各現場の状況に応じて異なっている。解体調査は緊張の連続である。金沢城の解体方法は業者と我々のペースを合わせたなかで進んでいく。一石にかかる所用時間は６～10分、この時間内に以下のことが行われる。

普通、解体には調査員２人が立ち会う。２人組は記録係、写真係にあらかじめ分けられている。まず、写真係が取り外す石の全体像と隣石との接点をアップで撮影する。記録係は用意してある記録用紙（図１）に、隣石の接点と取り外す石の下の状況を記録するため、取り外すべき石の輪郭を記入する。準備はこれで整った。「お願いします！」と威勢のいい調子で声をかければ、今度は石工が腕を振るう番である。職人は慣れた手さばきで数百キロの石にワイヤーを掛け（写真１）、クレーンで吊り上げる。職人の背中からは長年の経験と厳格さがにじみでる。地上から２m位宙に浮くとすかさず写真係が石の裏面を撮る（何百キロある石の裏は一応この時しか見られない）（写真２）。無事に石が運ばれた後、解体した石の下には幾つかの川原石などが敷いてあり、たった今取り外した石の輪郭と矛盾しないように、その状況を記録せねばならない。しかし、たいてい事は簡単に運ばず、隙間から入った何百年の積もり積もった土や草木の根を取り除かねばならないという作業があるのだ。当然その仕事はフリーの身である写真係に降りてくる。写真係といってもあちらこちらと大変である。掃除後、きれいになった状態を撮る写真係を横目に記録係の最大の山場がやってくる。記録用紙に河原石等の配置を図式化し寸法を計り、石垣の石と噛み合っていた接点の箇所等、気づいた点を暗黙の制限時間の中で記入する（写真３）。記録係は沈黙のプレッシャーを感じつつペンをとる（そんな時にクサ

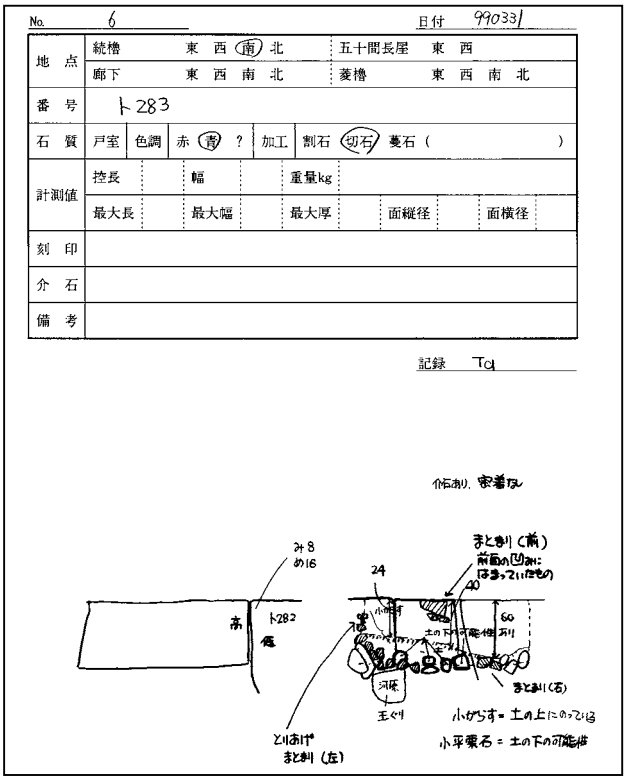


調査区（S=1/2,000）

明治初期の菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓

ビやカスガイが出てくると10分以内で終われない)。あらゆる重圧の中での格闘は終了と同時に一時の満足感にひたれる。感動のあまり心なしか「お願いします」が誇らしげな美声と変わる調査員もいる。こうしてできた一枚の記録用紙は今後の貴重な資料となって整理される。これを朝８時半から夕方５時まで繰り返せば一日60～80石になり、石垣内部で遺跡が検出されない（平面調査のない）時期は毎日これを繰り返す。解体数は約3500石、調査員は５人、単純計算すると、一人当たり700石分瞬時の記録をとらねばならない。

ここまでだけでも唖然とするかもしれないが、話はまだ終わらない。今度は解体し終わった石自体の観察記録を二の丸広場で行わなければならない。さらに一人700石、これで合計1400石。こちらの場合は、多少調査側のペースで許される。だが遺構面の調査や資料作りで手がとられ観察できない時期など、気が付くと数百個の石がたまってしまう難点もある。調査の視点は、戸室山（石は戸室石と呼ばれる安山岩で戸室山から切り出した）の石をどう割って加工したのか、火災などで受けた傷害、石垣に積むということを考えるとどういう点を意識して石を形創ったのかなどである。記録方法は前述と同様の記録用紙を活用する。火災時に焼けた痕跡や鉛瓦が溶け落ちた鉛の付着ヶ所、面縦横の最大幅と胴の最大長の計測、矢穴（という石を割るための穴）の間隔や大きさの計測、加



No. 6　日付 990331

地点	統櫓	東 西 (南) 北			五十間長屋	東 西			
	廊下	東 西 南 北			菱櫓	東 西 南 北			
番号	ト283								
石質	戸室	色調	赤 (青) ?	加工	割石 (切石)	蔓石 ( )			
計測値	控長		幅		重量kg				
	最大長		最大幅		最大厚		面縦径		面横径
刻印									
介石									
備考									

記録 To

図１　解体時の記録用紙

写真１ 石垣の解体風景

写真２ 石の裏面

写真３ 解体後、記録をとる調査員

工調整方法をA～Eなどで表しノミの入れ方などから、加工方法や技術を調査していくものである。果たして菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓では特徴が違うのか。そして、観察を通して石垣の表面や胴に符号が打ち込まれているのに気が付いた。その種類は数十種類にものぼり大きさも大小様々でノミでくっきりと彫られているものもあれば、彫られた後に一部ハツられ不鮮明になったものもある。これは「刻印」と呼ばれるもので、観察を進めるに従って石垣改修と関係してきていることが判ってきた。

写真４ 「ひょうたん」の刻印

２　江戸時代の改修範囲

菱櫓、五十間長屋、橋爪門続櫓はそれぞれ違った方法で独自に造られており、少なくとも江戸時代の中期と後期で大々的に改修を行っている。石垣の積み方や石材の加工状況、さらには石垣を背後で支える裏込め石、ないし土の切り合い関係などで明らかになってきた。改修箇所は、江戸中期頃の場合、五十間長屋（五十間長屋折れ曲がり部分から橋爪門続櫓の手前まで）が相当する。五十間長屋北東隅に宝暦13年の年号と鍬始鋤始の文字を刻んだ刻石が出土したのもさらに裏付けの一つとなる。江戸後期頃の場合、橋爪門続櫓石垣台が相当する。ということは菱櫓から五十間長屋折れ曲がり部分が一番古い様相を留めており、次に五十間長屋、橋爪門続櫓の順で新しくなっている。文献でも何度かの修築記録がある。宝暦13年(1763)五十間長屋石垣改修の記録（註１）、天明7年(1787)橋爪門続櫓石垣普請の記録（註２）、文化5年(1808)同石垣改修のための図面等（註３）が存在する。これらは上記調査結果と大略合致するものである。

３　刻印と改修

金沢城の石垣をじっくり観ると”卍”「萬字」”　”「ひょうたん」”　”「松ノ葉」”　”「三ツ団子」（写真４）（註４）などが刻まれている。これらの刻印は主に石垣の正面に多く、正面に二種類あったり、正面以外の胴部分にも刻まれている。また、石垣裏の補強石や栗石中の戸室石といった石垣内部にも刻印が存在していた。橋爪門続櫓内部から検出された高さ約２mの石積み最上部の南西角には「三ツ団子」が、五十間長屋内堀側補強石からは二石、「御用」の文字と共に「丸ノ内十文字」が打ち込まれていた（写真５）。刻印は城内だけではなく戸室山に近い、丁場と推定されるキゴ山の自然石と加工石にも発見されている。これらの石には幅約２cmと城内のものよりも太い線ではっきり

写真５ 「御用」と「丸ノ内十文字」

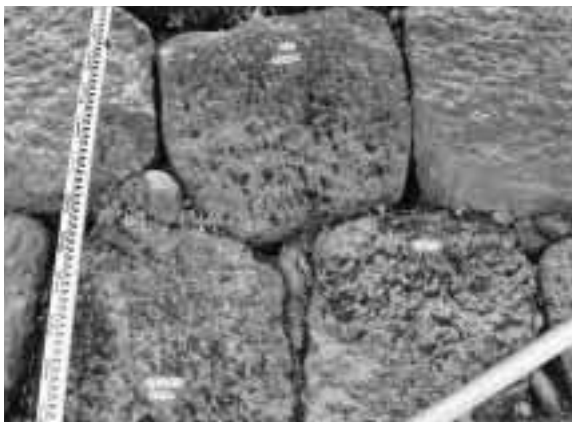


写真６ 菱櫓石垣にある「一」「二」の刻印

と刻まれているのもある。実に様々な場所で刻印の存在を確認することができた。

当調査区の刻印の傾向を見ると改修された範囲とそうでない範囲では、刻印の多さや使われている種類に違いが見受けられる。石垣表面の刻印に限った場合、一番古いと想定される菱櫓から五十間長屋折れ曲り部分の石垣には比較的多くの刻印が残るが、改修された江戸中期の五十間長屋部分はそれよりも少なく、さらに江戸後期に改修した橋爪門続櫓の切り込みハギ石垣（石の表面を丁寧に調整した切石造りの石垣）には全くない。種類では、菱櫓から五十間長屋折れ曲り部分の内堀側では漢字の”一”“二”“三”“大”に似た刻印（写真６）がまばらにあるが、他の箇所にはほとんど見られない。

これはどういったことであろうか。よく云われているように、寛永８年(1631)の大火により、藩主の御殿が本丸から二の丸に移行した時に最初の石垣が築かれたとしたならば、最初の普請ではどれだけの刻印が存在していただろうか。もし菱櫓がその頃の面影を残すなら、菱櫓から橋爪門続櫓にかけての広い範囲で多くの量の刻印が存在していた可能性が出てくる。後世の改修において火災やはらみなどでもろくなった石をそのまま使うのではなく、加工調整を施し再び石垣に戻してやるという方法をとった場合、当然改修以前の刻印もハツられ部分的に残ったり又は消失するものである。五十間長屋では確かに薄くなったものや削られて半分になったものがある。もちろん新素材を新たに使用することだって考えられる。

刻印付けは江戸初期の頃が最も多く、その当時の形態を菱櫓が留め、時代が降るに従って刻印付けの量が減少したと考えるなら、五十間長屋や橋爪門続櫓が改修された事実と一致し、刻印と改修との関係が明らかになる。つまり、刻印という側面から改修を裏付けられることになる。しかし現段階では、あくまで可能性に留めて置きたい。なぜなら、刻印の起源や意味がわかっていないからである。なぜ改修された石に刻印を打たないのか理由付けができないのである。前田藩の家臣の合紋とも考えられているが（註４）（表１）、これだけの刻印があっていつ誰がどこで打ったのか確かな文献、史料が現在ないからである。石垣、石採場が揃っており、あとは文献だけなのだが…。判らないことが多いこれらの符号を今後も調査していきたい。

刻印	名称	諸士録	石高
卍	萬字	横山山城守長知	三萬石
	ひょうたん	村井左衛門長家	一萬六千五百六十九石
	松ノ葉	本多安房守政重	五萬石
	三ツ団子	寺西若狭秀勝	七千石
	丸ノ内十文字	奥村伊予守永福	一萬一千九百五十石

表１　刻印照合一覧表（田端寶作　金沢城石垣刻印調査報告書より）

註１　「文禄年中以来等之旧記」　『金沢城郭史料』　194頁

註２　「文禄年中以来等之旧記」　『金沢城郭史料』　198頁

註３　「橋爪一之門台並櫓台石垣積直指図絵図」　『金沢城郭史料』　445頁

「橋爪櫓台石垣積直出来曲尺合等之控絵図」　『金沢城郭史料』　446頁

「橋爪門櫓台下石積之図」　『金沢城郭史料』　453頁

註４　田端寶作　1976年　金沢城石垣刻印調査報告書　城郭石垣刻印研究所